

父もろとも
ことほぐなるらん』

ゆるぎなき御代

かるた遊び

わづま

かるたとるとて

源氏平家と

きはひさやめく

むべ山風の

源氏の方の

秋の草木に

しをればてゝぞ

つどふ友どち
たち分れつゝ

聲ぞにきはふ

われにわれつゝ

勝ちに勇めば

わらぬ平家の

かこち顔なる

ひとゝせ

つねを

うらく霞む春の朝

治まる御代のとほぎを

青葉しげれる夏の暮

いつか涼しき橋の上

聲をさそひてうたはまし

鳴く鳥の音にわはせつゝ

星の光にあこがれて

登追ひ行く少女子と

空も露けき秋の夜の うきことながき山鳥の

頭に霜のかゝるまで 澄み行く月をながめつゝ

北風さむき冬の月や 柴の戸閉てわたゝかく

語らふ折やいつのまに 雪に見なれぬ花の庭

花の下かげ池の水 月の光や雪の窓

夢見るまゝにかはりきて ひととせながら面白し

お年玉

みづ子

小石川の護國寺の西に、杉の生垣を繞らした風

流な庭のある、小じんまりとした二階家に、長のス

ラリとした何處となく重々しい、年の頃五十許り

の奥さんが、たつた一人で住んで居りました。

此奥さんは元某大尉の長女で、十八の時、大

教育家といはれた〇〇女学校の校長松田秀雄の所

へお嫁に来たのでありましたが、今から三年程前